

獣に咬まれたニホンイシガメの幼体

小賀野 大一

千葉県野生生物研究会

A juvenile of Japanese pond turtle *Mauremys japonica* bitten by a beast

By Daiichi OGANO

Chiba Wildlife Research Society, 962-40 Semata, Ichihara-shi, Chiba 290-0151, Japan

矢部(2002)は、ニホンイシガメ*Mauremys japonica*(以下イシガメ)の卵の捕食者としてイタチなどの小哺乳類やカラスなど、ある程度成長してからは野犬などによる捕食を示したが、幼体の捕食者はよくわからないとした。その後、淡水性カメ類の幼体の捕食者に関する情報が報告されたが、その数は未だに少ない(加賀山, 2018; 加賀山, 2020など)。一方、You-Tubeを含むSNS上では、アオサギ*Ardea cinerea*がスッポン*Pelodiscus sinensis*と思われるカメ類の幼体を丸呑みにするという捕食映像などが見られるが、文献として利用できる(いつ, 何処で, 誰かがわかる)報告はなかなか探すことができない。そこで本稿では、最近の調査において獣による捕食行動の痕跡が残るイシガメ幼体を確認したので、カメ類幼体の捕食者に関する一例として報告したい。

筆者は房総半島東部を流れ太平洋側に注ぐ河川の上流域において、2011年よりニホンイシガメの個体群調査を行ってきた。この地域は、半島南部や東京湾側の淡水性カメ類の生息地と比較すると、アライグマ*Procyon lotor*によるカメ類の捕食被害は少なかった。しかし、今回この調査地において、アライグマによると思われるイシガメの捕食被害とともに、獣に咬まれた痕跡が甲羅に残るイシガメ幼体を同時に確認した。以下にその詳細を示す。2020年10月26日に実施した調査で、寄り添うようにして日光浴をする2個体のイシガメを確認した(図1)。大きい方の個体は背甲長134.31mm, 体重345gの6歳になる雌で、両前肢が欠損していた(図2)。欠損部位が前肢の根元から咬みちぎられていることと、甲羅には肉眼で確認できるキズや咬み跡が見られなかったことから、前肢を器用に使うことができるアライグマによるものと考えられた。一方、小さい方の個体は背甲長61.57mm, 体重32.0gの昨年生まれた1歳幼体で、背甲の左肋甲板4枚目に1箇所、腹甲の左胸甲板に2箇所、右胸甲板と右腹甲板にそれぞれ1箇所の計4箇所の円形の咬み跡が確認された



図1. 日光浴をしていた大小2個体のニホンイシガメ(上の矢印:6歳の雌, 下の矢印:1歳の幼体)



図2. 両前肢が欠損したニホンイシガメ(6歳の雌)

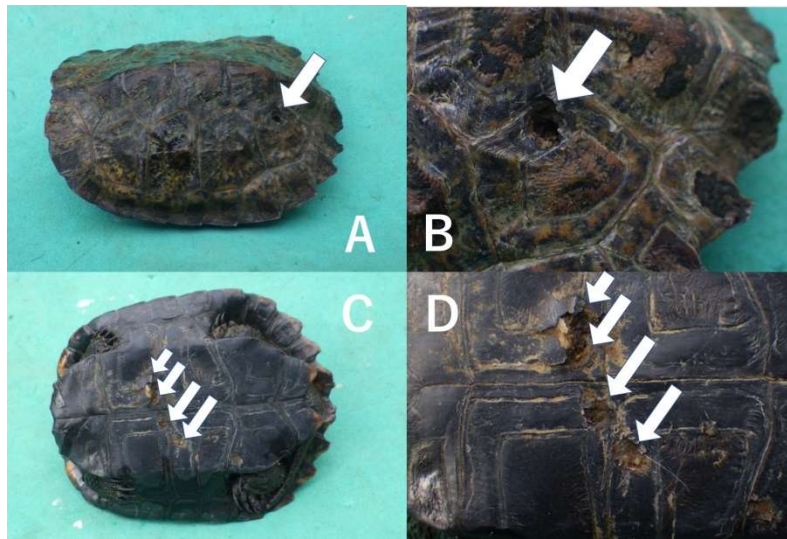


図3. 獣に咬まれたニホンイシガメ(1歳の幼体).

A:背甲部の咬み跡, B:背甲拡大図, C:腹甲部の咬み跡, D:腹甲拡大図(白矢印は咬み跡の部位を示す)

(図3). この幼体を加害した獣は今のところ不明であるが、アライグマであれば幼獣であったとしても丸ごと捕食されるサイズと思われた。あくまで想像の域を出ないが、小さいイシガメを捉えたときに大きいイシガメに気づき、咄嗟に捕食対象を大きい方に変更した可能性も否定できない。アライグマを除くと、本調査地で咬み跡を残す獣として考えられる種は、ニホンイタチ *Mustela itatsi*, タヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus*, ハクビシン *Paguma larvata*, イヌ *Canis lupus familiaris*, ネコ *Felis catus* などが挙がるが、いずれかを特定することは残念ながらできなかった。

引用文献

- 加賀山翔一. 2019. 哺乳類に補食されたと考えられるニホンイシガメ幼体の死体. 亀楽 18:8-10.
 加賀山翔一. 2020. 前肢を欠損したニホンイシガメの孵化幼体. 亀楽 19:25-26.
 矢部隆. 2002. 里山のカメ類. p.176-184. 広木詔三(編) 里山の生態学. 名古屋大学出版会, 名古屋.